

書の光栄ある運命」である。その時本書の原著は改変されるであろうが、この訳書も遅滞なく訂正されることを訳者と出版者にお願いしておきたい。

天体アルバム 誠文堂新光社発行、B5判、124ページ、450円

誠文堂新光社は学校天文台や、アマチュア天文家が撮影した天体写真を数多く掲載した雑誌「天文ガイド」を発行していることは多くの本会員諸氏も御存知のことと思う。本書はその12月臨時増刊という形で、ウィルソン山・パロマ山天文台撮影の天体写真を収録している。写真の一つ一つにはその所在を示す案内星図が示してある。巻末には高瀬文志郎氏が種々な天体について要領よく解

説されており、また冨田弘一郎氏の天体望遠鏡と天体写真の発達という一文があって、ここに集められた写真の持つ意義が明らかになっている。手頃な天体写真集として本会会員諸氏に御すすめしたい。(広瀬)

(8頁よりつづく)

この小文に述べたX線天文学は現在の段階にたったものであるが、絶え間ない研究がすぐまた書きかえるべき箇所を作ることを期待して筆を置く。

なおX線天文学についてもっと詳しいことを知りたい方は S. Hayakawa, M. Matsuoka and D. Sugimoto, Space Science Reviews (印刷中) を参照されたい。

雑 報

非常に小さな凝縮矮星雲 星雲の性質をより深く究めるため、200インチ望遠鏡による、特異星雲の系統的写真観測プログラムが1961年より開始され、昨年完了した。この結果は、「特異星雲写真集」として発表されるはずである。この中には、明るさの割には非常に小さな

星雲も含まれているが、そのひとつについて、アーブが報告している。(Arp, H., Ap. J. 142, 402, 1965)

この天体は、 $\alpha=11^h17^m6$, $\delta=+51^{\circ}41'$ (1965), 見かけの写真等級それぞれ 17^m8 , 17^m9 , $1:1$ はなれた二重星状に写真ではうつっている。主な輝線(吸収線は見つかっていない)の赤方変移より求めた後退速度は、乙女座星雲団と同程度の 1326 km/sec で、星雲と考えられる。この視線速度から距離を決めると、 13 Mpc となり、したがって絶対写真等級はそれぞれ、 -12^m7 , -12^m8 , 実直径はなんと 70 pc という。極めて小さい凝縮した星雲である。

図は代表的いくつかの星雲●、および球状星団○についての光度—直径関係を示したもので、この星雲は◎の位置にプロットされる。球状星団と同程度の大きさで、これまで矮星雲($\sim M_{pg} = -16m$)といわれているものより10倍暗く、並通の星雲の列から左にはづれ、むしろツウイッキーの密な星雲●にならびそうである。

このような凝縮矮星雲が、長い宇宙年令(10^{10} 年)にわたって、輝線を示すべくガスを励起しつづけた機構は何か? また初期宇宙の小さな密度変動が、現在まで如何にして凝縮をつづけることができたか? 等興味ある問題も生じてくる。そして図の星雲—球状星団間の領域に分布する矮星雲の、存在および発見可能性のカナメとも考えられるこの矮星雲は、さらに詳しく観測される必要がある。

